

# 生成AIは議会を変える ～“補完する”価値、“決める”責任～

青森大学社会学部教授 佐藤 淳

## なぜ今、生成AIなのかを考える

今日のテーマは、「生成AIは議会を変える」です。この“変える”方向は、進化させる方向と、消滅させる方向の2つの可能性があると思っています。そして進化させるか、消滅させるかは、皆さんがどのように生成AIを使うのかにかかっています。

この講演の目的は3つあります。まず、生成AIで議員活動の何が変わるかを理解してもらい、2つ目は明日から試せる具体的な使い方を1つ持ち帰ってもらい、3つ目は議会としての活用イメージを持ってもらうことです。

私はいろいろな議会で、監視機能だけでなく、どんどん首長に政策提言していけるような議会になりましょうという話をしています。その政策提言のところで、議会としてAIを活用していこうという提案です。

まず、なぜ今、生成AIかという話から始めます。

去年の秋頃から熊の問題が頻繁に出てきたので、熊問題について生成AIに考えてもらったらどうなるのかというのを試してみました。

最初に、熊問題に関連しそうな登場人物を6人設定しました。農家の方、子育てをしている主婦、自治体で熊の問題を担当している環境の部署の方、猟友会のメンバー、こうした環境問題を研究している研究者に加え、ここが私のひとひねりなんで

すが、擬人化した熊を入れてみました。この6人で熊問題について対話してもらえませんか、とAIに指示をしました。すると、「人と熊が無用に出会わない里山を再生し、安全と自然が両立する地域を目指せばよい」というビジョンが一瞬のうちに返ってきました。6人があれこれ議論した中で、擬人化した熊が「我々も、出てきたくて人間の住んでいるところに出て行っているわけじゃない」と言ったのです。

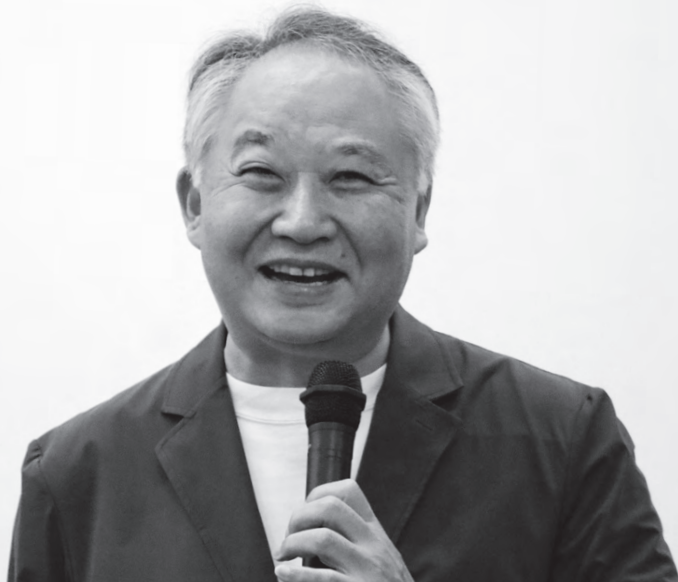
私、はっとしました。我々人間の立場だと、熊が悪くて猟友会の皆さんに退治してもらい、というような感覚にどうしてもなりがちですが、擬人化した熊が言うように、熊からすれば森の中が昔のような環境だったりエサがあったり、森と人間が住んでいるところがここまで隣接していなければ出てこないよ、ということになる。だから、人と熊が無用に出会わない里山を再生し、安全と自然が両立する地域をつくりましょう、というビジョンが出てきたのだと思います。

そしてこの6人からは、次のようなアクションプランも出てきました。①緊急対応として、出没時の即時対応と住民の安全確保、②被害の軽減として、電気柵や集落周辺的环境管理の強化、③里山再生として、森林整備、放棄地の管理、山のエサ資源の回復、④ハンターの支援として、若手育成や捕獲体制の持続性を高める、⑤科学的データに基づく地域管理、⑥地域ぐるみの里山協議会の設置、などです。

## 佐藤 淳 (さとう あつし).....

### 略歴

1968年青森県十和田市生まれ。1992年早稲田大学商学部卒業、さくら銀行（現三井住友銀行）入行。2006年日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科修了。2007年早稲田大学大学院公共経営研究科修了。2008年早稲田大学マニフェスト研究所招聘研究員。2022年～青森大学社会学部教授。「人をつなぎ成長を支援し、笑顔で前向きに進む地域（チーム）を創る」を動詞の仕事に、地方自治体の人材開発、組織開発、地方議会改革、市民共創のまちづくり、地域のイノベーションをテーマに探求を行う研究者、実践者として活動中。



全国の議会で、一般質問で熊の問題を取り上げた方がたくさんいらっしゃったと思いますが、AIを使えば一瞬です。あとは、このアクションプランを、首長が予算を見ながらやるかやらないか、優先順位を決めればよいのです。

これをやり終わったときに、私は思ったのです。AIがこれだけ進化して、よい議論をして解決策を導いてくれる、だったら議会や議員は必要か？と。私は必要だと思っていますし、今、地方議会は大きな分岐点にいると思っています。

さて、生成AIの影響によって、議会はどういう方向に進んでいくのか、3つの未来シナリオがあると考えています。

シナリオ1は、「生成AIを、議員の質問づくりや調査の効率を上げるためだけでなく、住民の声を深く理解し、よりよい政策をつくるために活用する議会」です。積極的に、かつ上手にAIを使っていく議会に変われるかどうかといったものです。

シナリオ2は、「生成AIを便利な道具としてだけ使って、スピードや効率ばかりを重視してしまい、議員の仕事がAIを使った原稿を読むだけになり、住民の声が置き去りになる議会」です。最近よく、「うちの議会で、AIを使って一般質問をつくっている議員がいる。その質問が薄っぺらい」と言ってくる職員が結構います。いやいや、薄っぺらいと言うけれど、自分たちもその議員がつくったAIの一般質問をAIに放り込んで答弁を考えているんだから同じでしょ？と言っています。AIでつ

くった質問にAIでつくった答弁、そこに人は誰もいない、といった状態がシナリオ2です。

シナリオ3は、「『議会の伝統が大事だ。AIなんて信用できない。』として、生成AIを使わずに運営を続けた結果、社会全体が変化する中で議会だけが時代に取り残される」というものです。イラスト化すると、外はすごく近未来的ですが、会議室では電卓で計算していたり、ブラウン管のテレビがあったりするザ・昭和なものになりました。

私は、いろいろなところでお話しさせていただいていますが、シナリオ3に向かっている議会が、全国で増えていると感じています。またはシナリオ2。シナリオ3になると完全に取り残されます。シナリオ1の方向に、ぜひ向かってもらいたいという思いです。

とはいえ、私は議員のみなさん全員にAIをバリバリ使えるようになってください、と言っているわけではなく、議会内での役割分担が必要だと考えているのです。得意な議員や議会事務局の職員は、議会での議論を支える役割で、AIを駆使したデータ分析や資料作成をどんどんやっていけばよいと思っています。

苦手な議員さんはどうすればよいかという、できる範囲でやりましょう。やっているうちに、面白くてのめり込むかもしれませんし。そして、これが一番大事なんです、「反対しないこと」も貢献です。若い議員やAIを使っている議員に、おまえらはずるい、AIは嘘をつくからこんなものを使っ

たらダメだなどの反対をしてしまうと、先ほどのシナリオ3に爆進してしまいます。役割分担をして、議会全体の意思決定の質を高める、議会全体の質の向上というのを目指していてもらいたいです。

## 生成AIの仕組みと活用の際の 注意点

生成AIというのは、新しいコンテンツを生成する画期的な技術です。一番の特徴は、人間同士のようなチャット形式で自然な会話ができる点で、代表例としてOpenAIのChatGPTやGoogleのGemini、AnthropicのClaudeなどがあります。

生成AIは、文章や画像の作成、要約や知識の解説、アイデア出しと翻訳のような多言語サポートなどを得意としています。

先日も、アメリカの英語で書かれている短い論文を、Claudeで日本語に訳してと指示したところ、指示から30分ほどで日本語になった論文を読み終えることができました。

では、どういう仕組みになっているかというところ、「大規模言語モデル」といって、英語ではLarge Language Model=LLMといたりします。LLMは、世界中のインターネット上にあるテキストデータのようなものを、全部読み込んでいる大きな仕組みだと思ってください。そして、入力された文の「次に来そうな言葉」を確率的に予測して、文章をつくっています。この言葉に続く確率が高い言葉はこの言葉、その次に続く確率の高い言葉は……と、つなげているだけなのです。

例えば「昔々」と我々が聞いたら、次に続く言葉は、「あるところに」が定番です。だから、「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが」と、文脈的に可能性が高い言葉を、ただつなげてそれらしい返答を生成しているだけで、知識データベースではないのです。ここを、まずおさえてください。ここが嘘をつくというところにつながってくるのです。ただ言語のつながりだけで、もっともらしい文章をつくっているのが生成AIなのです。

生成AIを活用する際の注意点は、大きく2つあ

ります。1つはファクトチェックを徹底することです。不正確な場合もあるため、事実かどうか、しっかり確認しましょう。2つ目は、機密情報を入力しないことです。個人情報や外部に漏らしたらいけないことは入れないでください。なぜかというところ、LLMの学習データとしてその機密情報が誰かに利用されるかもしれないからです。

例えば、3月の議会で、みなさんが審議した予算書や各定例会に提出される議案書は、機密情報ではないオフィシャルな書類ですから、私は基本的にAIに入力しても問題ないと思っています。

## 主要な生成AIのモデルと その特徴

生成AIには、いろいろなモデルがあり、私は用途によって使い分けています。

Perplexityはネット検索型の生成AIです。インターネット上にあるいろいろな情報から、例えば、子育ての先進地を教えてくださいといった、先進事例や視察先を調査するときなどに重宝するのは、Chat GPTよりPerplexityです。

万能対話型がChatGPT、Gemini、Claudeなどです。巨大な学習済みデータの中から、幅広い質問への回答や文章作成を行います。これは一週間ごと、一月ごとに使いやすさが変わるため、どれが一番とは言いきれないのですが、私は今（2026年4月21日現在）はClaudeが一番使い勝手がよく、賢いと思っています。

入力した資料の内容を読み取り、要約や分析、質問への回答をする資料分析型が、GoogleのNotebookLMです。例えば予算書を入れると、予算書だけを分析してくれます。ChatGPTに予算書を貼り込むと、その予算書のデータだけでなく、世界中のインターネット情報からもデータを引っ張ってくるので、的外れな答えが返ってくる場合があります。一方、NotebookLMは、入れた情報ソースだけを分析して答えを出してくれます。

画像をつくるには、GoogleのNano Bananaという、Geminiの中で駆動する画像生成のサービスがピカイチです。ChatGPTで画像やスライドをつ

くってもらおうと、文字化けすることがありますが、Nano Bananaはほとんどありません。

さて、生成AIを使うときに一番大事なのは、プロンプトです。生成AIにどういうお願いの仕方をするのか、というのがプロンプト＝指示文で、よい質問やよい指示をするとよい答えが返ってきますし、曖昧な指示をすると、曖昧な答えが返ってきます。よい指示とは、明確な指示と条件設定をすることです。また、1回で答えを出そうと思わず、試行錯誤することも大事です。

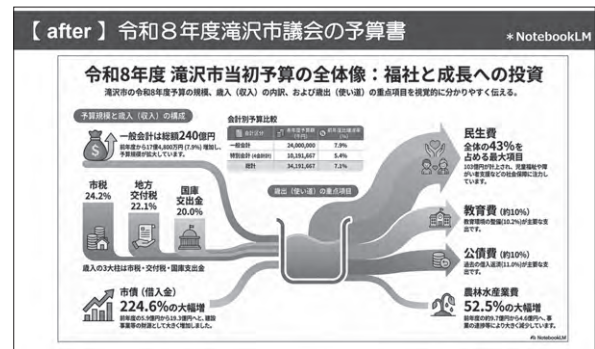
一番のポイントが、「困ったらAIに聞く」こと。結構知らない人が多いのですが、どういうプロンプトで聞いたらよいかわからないときは、AIに聞けばよいのです。こういう問題についてAIに調べてもらいたいと思うのですが、どういうプロンプトにすればよいかと聞くと、こういうプロンプトで聞いたらよいと出てくるので、その中から使えそうなプロンプトを使うと、よい答えが返ってきます。

## 生成AIを使った インプットの事例

次は生成AIの活用法についてです。昨年『地方議会人』という雑誌の12月号に、私がアドバイザーを務めている岩手県の滝沢市議会で、予算決算審査の際、議員間討議をして、予算や決算に政策提言、付帯をつけたりする取り組みについて寄稿させていただきました。

3ページ分ほどの原稿にまとめたのですが、文字が多くてあまり読む気がしません。そこで、この原稿をNotebookLMに放り込んでイラスト化しました。イラストやグラフなどを使ってビジュアルに表現する手法をインフォグラフィックといいます。文章だけだったものがわかりやすいイラストになると、読もうかなという気になります。

また、滝沢市議会の令和8年3月の議会で議論した予算書についての例です。予算書自体が27ページ、予算に関する説明書が230ページあります。これもNotebookLMに入力して、一枚のイラストにまとめてみました。昨年9月の決算のときより



※講演者作成講演資料より

も精度が上がり、今年の3月は計算や経年比較などもほぼ完璧にやってくれるようになりました。NotebookLMは、こうした作業に向いています。

Perplexityは、出てきた情報の裏付けとなるリンク先もついています。そこをクリックするとどこからその情報を引っ張ってきたかという一次情報もわかるので、ファクトチェックも非常にやりやすいモデルです。

調査をするときに一番使えるのが、Deep Researchという機能です。ChatGPTやGeminiが提供している高度な調査・分析機能です。

ChatGPTやGeminiの画面に出てくるDeep Researchのところを押して、「〇〇市における□□の課題について詳しく調べてください」と指示文を入れると、15分ほどで全世界のインターネット情報を検索しながら考えて、レポートをつくってくれます。

Deep Researchで作成されたレポートを、NotebookLMでインフォグラフィックにすることもできます。私がアドバイザーを務めている鹿児島県知名町議会の常任委員会が調査研究している「障害者・発達障害児支援の政策提言」についてDeep Researchしたレポート結果をNotebookLMでイン



フォグラフィックにしてみました。

このように、生成AIを使うと調査の仕方が本当に変わります。私は日常的に、何か疑問に思ったらそれを問いに変えて、スマートフォンのChatGPTやGeminiに放り込んで、確認しています。

自分が考えたことや疑問に思ったことは、世界中の誰かが必ず考えていて、インターネット上にテキストとして残しています。そういう前提で、詳しく調べたほうがよいと思ったことは、Deep Researchします。そして15分ほど考えさせておいて、私はその間、違う仕事をします。15分後にできあがったレポートを見て、わかりづらかったらNotebookLMに放り込む、そんな感じで使っています。以上が、インプットについてです。

## AI時代だからこそ求められる議員の役割

次はアウトプットについてです。みなさんの活動を、どのようにして住民に伝えていくか、という点です。私の大学のゼミの教え子にある市の市議会議員がいて、今、生成AIを一生懸命使っています。去年の6月議会で、彼が一般質問した内容の議事録も、データをNotebookLMに放り込むと、1分ほどでインフォグラフィックができあがります。

彼は職員の人材育成、給食センター、市長の政治姿勢など3つぐらいのテーマで一般質問したものを、生成AIでイラスト化して支持者にSNSで発信したり、活動の紙媒体のチラシにも使って、自分の活動を報告したりしています。

NotebookLMがすごいのは、テキストデータだけでなく、YouTubeの動画もまとめてくれる点です。もしご自身の一般質問の動画がYouTubeにあ



※講演者作成講演資料より

るようでしたら、それをNotebookLMに入力して、インフォグラフィックを試してみてください。

私がアウトプットで一番最初が変わるのは、「議会だより」だと思っています。知名町議会の「議会だより」のPDFデータをNotebookLMに読み込ませてできあがったインフォグラフィックがあります。このようなイラストが豊富な「議会だより」だったら、ちょっと読んでみようかなと思う市民も出てくるのではないかと思います。

さて、議会とは、憲法第93条で議事機関だと定められており、議事機関とは、団体の意思を決定する機関のことで、それぞれの自治体の意思を決定するところです。我々は合理的に意思決定しているようで、していないのです。問題を明確化して、意思決定の基準を明確化し、選択肢を全て考えて、評価して、最良の選択を選ぶ、というのが合理的な意思決定だとすると、できていません。時間が限られているし、市民の意見を全部聞いているわけではないし、抜け漏れている論点があるかもしれません。そういうのを、生成AIが補ってくれる可能性があると思っています。生成AIを、議会としてうまく使うと、本当によい議論、よい意思決定ができるのではないかと考えています。

ただ、なかなか活用が広がらないという現実もあります。まずは個人で活用してみてください。その後は、会派で使ったり、それがうまく使えてきたら議会全体で議員間討議などで使ってみてください。

講演の冒頭で熊の話をしたとき、これだったら議会は要らなくなるのではないかという話をしました。でも私は、絶対、議会は必要だ、とも言いました。この生成AIの登場で議会の議員の役割が大きく変わると思っています。そこで、議員にとっては次の3つの役割が重要になります。

1つ目は、市民の声を聞くということ。生成AIの説明で、生成AIはインターネット上にあるありとあらゆるデータの中から、もっともらしいことを生成するものだと話しましたが、それぞれの自治体の住民のみなさんの声は、どのぐらいインターネット上にありますか。実際の地域で起こっていることや生の声は、インターネット上にはありません。だから、そうした住民の意見をしっかりと聞いたり、問題が起きている現場に行き、肌感覚をつかんだりする役割は、今まで以上に重要になります。

2つ目は、課題を設定すること。例えば、「〇〇市の課題を抽出してください」と生成AIに入れるといくつも出てきて、それに優先順位をつけてくださいと指示すれば、1番から10番まで優先順位をつけます。しかし、それでよいのかという話です。生成AIが出してくれたいろいろな課題の優先順位を決める責任というの、議員のみなさんにあります。

3つ目の、決断し実現する、という役割も、これからより大事になってくると思います。政策提言して、それを実際に市長や町長に実行してもらうということは、人間である議員の皆さんの大事な役割です。私は、AI時代、この市民の声をしっかりと聞く、課題設定、課題の優先順位をしっかりとつける、決断して実現するという役割が、より議員の皆さんに求められるようになるのではないかと思います。

これをやらないなら、議員は要りません。AIで

よいのです、AIのほうが賢いですから。議会が進化するのか、消滅するののかというのは、皆さんのAIの使い方次第です。この3つのことを、自分たちの役割だとしっかり認識して取り組んでいけるかどうかにかかっています。

最後に、明日からできる3つのアクションについてです。まず、スマートフォンでChatGPTの無料版をインストールしてみてください。Geminiでも結構です。インストールして「〇〇について200字で説明して」みたいなことをしてみてください。これが、1つ目です。

これをすでにやっている方は、次の会議の資料をNotebookLMでPDFをアップして、「要約してください」などの指示を出してみてください。YouTubeの動画があるようでしたら、URLを貼りつけてイラストにしたり、ラジオ風の音声解説などで遊んだりしてみてください。

3つ目は、視察に行くことがあったら、事前にPerplexityで「〇〇の政策の先進事例を教えてください」と指示してみてください。たくさんの事例が出てきますので、参考になるかと思います。

生成AIについてよくある質問の答えをお話しします。お金がかかるのですか、有料版のほうがよいですか、といった質問がきます。確かに有料版のほうが賢いです。ただ、無料版でも十分スタートできます。例えばDeep Researchのレポートをつくる機能は、無料版でも使えます。回数制限があったり、レポートの深さが違ったりするのですが、無料版でも問題ありません。

情報漏洩が心配です、という質問もきます。個人情報など機密情報以外は大丈夫です。入力する前に、いったん考えてみて、大丈夫だと確認したら入れてもらえればと思います。

議会でするにはどうすればよいのか、といった質問ですが、議会や議員のみなさんが一般質問に使うような場合でも、ガイドラインをつくったほうがよいでしょう。執行部でAI活用のガイドラインをつくっているところがあるので、見せてもらいながら議会版としてアレンジするのもよいのかと思います。